

令和5年度秋田県放課後児童支援員認定資格研修 研修レポート抜粋

(誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります)

県北会場

科目 ⑥障がいのある子どもの理解

- ◆ 様々なタイプの障害があり、特徴もそれぞれで、子どもの困り感に向き合うためには、対応の工夫がとても重要であることを学びました。障害の特徴を詳しく知ることができ、子どもの特性と向き合う手がかりを得たことは自信にもなりました。放課後児童クラブで過ごす時には、障害の有無に関わらず、子どもの小さな変化に気付き、安心して過ごせる環境として大人の対応が影響するという心を留めて見守っていきたいです。
- ◆ 障害の捉えとして、克服する努力が必要な個人モデルと環境のバリア次第で変わる社会モデルがあることを学びました。大人からみる気になる子どもは、上手くできない感を感じていて、特別な支援ではなく当たり前の支援と考えて支援することが大事だと感じました。一番の学びとなったのが、子どもの行動の背景を予測するということです。そして、更に「肯定的な注目」と「否定的な注目」では、褒めることの大切さを改めて感じました。大人の言動から学び、それを見て真似るのが周りの子どもたちです。障害のある子の支援は環境からの働きかけが多々ありますが、指導者の対応が一番の刺激となるので、ここがバリアになってはいけなさと学びました。
- ◆ 障害は様々あり、特性を理解した上で配慮し、対応していくことが大切だということを知りました。認知能力や適応能力は低いので、どのように困っているかを知り、理解して対応していかなければなりません。指導者の態度も大きく影響するので、環境を整え、工夫した上手な対応が必要だということを知りました。指示は分かりやすく、簡単に具体的に繰り返すことが大事だということも学びました。
- ◆ 発達障害は「特性があっても周りが上手に対応できていれば困りません」という言葉がありましたが、今回の講義で私たちは子どもたちに対する対応がまだ不十分で、対応しきれていないことに気付かされました。ADHDは新しいこと・変化への不安が強かったりとそれを乗り越えるのは本人の努力だけではどうしようもなく、想像以上の労力が必要です。私たち支援員は子どもたちの気持ちを想像して、存在がバリアにならないように対応をよく考えなければいけないと思いました。
- ◆ 障害の有無に関わらず子どもの行動は環境の影響を受けており、この環境には私たち放課後児童支援員も含まれています。学習や行動に困難のある発達障害がある児童の割合が年々増加しているということであり、周りが上手に対応することが大切です。一人一人の特性を理解し、支援していこうと思いました。